



吉田由美子さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月20日

癒され、励まされるたびに、私もそんな“元気の素”になりたいと思っています

梅雨の晴れ間、阿武隈高原の爽やかな風が心地良い日に、田村市船引町のご自宅にお邪魔しました。敷地内には、交流拠点にと願って造られた、可愛らしいログハウスのサロン兼手芸店『Iyanbee(いいやんべえ)』があります。

たくさんの人たちの手によって作られたさまざまな作品に囲まれて、訪れた方々がお喋りをしたり、ゆったりした時間を過ごしたりしながら元気になって、「明日も頑張れるよ!」とってくれるような場所になったら嬉しいと、吉田さんは話してくださいました。



▲今、人気の麻紐バック(自作)を手に。「まもなくイベントなのですが、間に合うかな」と笑っていらっしゃいました。

◆3月11日、あの大地震の時はどうしていらっやいましたか
双葉町の実家で凄まじい揺れに襲われました。窓ガラスには亀裂が入り、庭の井戸から水が逆流していました。同居する夫の両親もかかりました。義父母と夫、子どもたち6人が住む自宅は築100年以上経つ古い家でしたが、相当丈夫に建てられたのか、それとも室原の地盤が頑丈だったのか、ものが落ちたり、停電になったりしたものの、何ともありませんでした。
ただテレビもラジオもつかなくなったので原発事故のことは全く分からず、4日目に訪れた自衛隊の方々から避難を告げられました。浪の義父を説得し、伊達市保原の叔父の家に。既に大勢の親戚が身を寄せていましたので、義父母を預け、夫と私と子どもたちは

飯坂温泉の旅館に3月19日まで滞在しました。飲料水もお風呂も有り難かったです。
◆この船引の家に落ち着かれるまでのことをお聞かせください
友人から「新潟県上越市に直ぐに入居できるアパートがある」と連絡があり、19日に移動しました。驚いたことに、部屋には人数のお布団が用意され、近所の方々が料理や鍋や釜、衣類に至るまで差し入れてくださいました。さらに、支援物資の案内をしてくださるなど、心を尽くして助けてくださいました。そんな上越市で当分暮らすつもりでしたが、社会から取り残されたくないよう、介護の資格取得を目指して学校にも通いました。今でもその時の仲間とは親しく連絡を取り合っています。
2013年に義父母が郡山市の借上げ住宅に移り、私たちも高齢の二人を見守るために福島に戻りました。義母は一年前亡くなりましたが、2014年春、この家が見つかりました。ここは、ふるさとの室原を思い出させるような、静かで、大らかな自然が楽しめます。義父も環境のおかげでしょつか、元気になりました。



▲船引三春ICから田村市方面に向かって車で約5分。道路沿いの看板が目印です。

『Iyanbee(いいやんべえ)』
田村市船引町春山仲ノ縄419番1
TEL.080(5221)1319(吉田さん携帯)
URL http://s.ameblo.jp/iyabee



浪江のころ通信

●第62号●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信/第62号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218

再取材シリーズ 再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。
3・11から5年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。





志賀みき子さん(樋渡)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：6月24日

床屋にお越しいただいていた皆さま、お元気ですか。私は那須で頑張っています！

震災前は、樋渡地区で「理容しが」を営んでいた志賀さん。現在は、栃木県那須町に新築した自宅で次男と暮しながら、自宅のすぐ隣に開店した「いなか本舗」で「なみえ焼そば」や定食などを提供しています。震災以後、気になっているのは、床屋に来てくださっていた方々の近況。「みなさん、どこでどんな暮らしをされているのか…」。

◆娘の側で暮らすことを決断
現在住んでいる那須町に引越したのは、平成27年2月。次女(娘)が那須町に土地を求め定住することを決めたからです。息子とも相談して、子どもの側で暮らしていこうということになりました。その後、平成27年11月に「いなか本舗」を開店。なみえ焼そばや定食をランチタイムに提供しています。

◆二本松市の仮設住宅での暮らし
震災後は、川俣町や猪苗代町に避難し、長く過ごしたのは二本松市の仮設住宅でした。自治会では班長を務めさせていただき、イベントや野菜の販売などを手伝ったりしました。浪江の方が住んでいたこともあり、知り合いや友達ができてコミュニケーションが取れていましたよ。仮設住宅に住んでいる期間には、同居していた叔母が平成24年に、夫が平成25年に亡くなりました。悲しく寂しい時間が流

◆避難指示解除後の悩みや心配
浪江の暮らしでの大切な思い出は、友人夫婦や知人と一緒に、双葉町の石熊山に小屋を作って楽しんだことです。斜面を整地し、しいたけの原木を置き、花見や芋煮会、カラオケなどをしたものです。ですが、今は線量が高いので今後も行けるようになるかわかりません。一緒に過ごした友人夫婦も今はバラバラ。残念です…。



▲「いなか本舗」の店内で、「定食：なみえ焼そばのAコース」を前に

『いなか本舗』
営業時間：11～14時
(3人以上の予約で時間外も可能)
定休日：月曜、火曜(臨時休業もあり)
栃木県那須郡那須町高久乙594-92
(道の駅「友愛の森」の裏手)
TEL 0287(74)5822

店は落ち着いた古民家風の造りでテラス席があり、席数は13席ほど。店横には小川も流れていま



村井阿理沙さん(棚塩)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：6月24日

自身も成長して、社会的に還元できる活動にしたい

国際協力機構(JICA)青年海外協力隊の平成28年度1次隊として、カリブ海にあるジャマイカへ2年間派遣される村井さん。初めての活動に対して不安に感じることはあまりなく、期待度95%とおっしゃいます。出発を3日後に控えての意欲あふれる気持ち、将来取り組みたいことなどを伺いました。



▲人との交流が好きという村井さん。聡明で明るい笑顔が素敵でした。

◆浪江の思い出
毎年のように友人と行っていた十日市では、チキンステーキとりんご飴を食べ、高校時代は自転車でサンプラザへ行き、友人とプリクラを撮ったりシヨッピングを楽しみました。また、うなぎ屋さんでのアルバイトや、みんなで海に行ったこと、縄のれんでなみえ焼そばをよく食べたことも思い出します。

◆活動内容・やりたいこと
これまでの仕事の経験を即戦力として活かして、現地語が英語のジャマイカは第一希望でした。職種はコミュニケーション開発。NGOとの活動を通してNGO自体の活性化、資金の調達も要請内容に含まれています。現地の方と密着しながら、地域のほかの問題点も一緒に探し出し解決策を見つけて活動していきたいと思っています。

◆帰国後のこと
5年以上働いてきたことや留学の経験、能力を活かせる機会を与えてもらったので、自分の成長も楽しみで興味があります。私自身は行政の仕事をしたことがないので、教えることより学ぶことが多いと思います。派遣を通して学んだことを活かし、社会的に還元できると思っています。帰国後は復職し、発展途上国に対して安くて質の良い薬を届ける活動をしていきたいし、青年海外協力隊に興味がある人の後押しをしたいと考えています。

由はありませぬ。青年海外協力隊に興味を持ったのは中学生の頃。アフリカを特集した国際協力のドキュメンタリーで、子どもたちの綺麗で純粋な笑顔を見て、自分の力でこの笑顔を作りたいと思いました。それから時間は経ってしまいましたが、会社の上司と将来について話すうちに背中を押してもらい応募しました。



岡田ミヨ子さん(井手)

いわき市内にお暮らしの岡田さんから、近況をお知らせいただきました。

お世話になった、たくさんの方に お礼の気持ちを伝えたいです

あの日から5年5か月が経ちます。わが浪江町での思い出がいっぱい。出逢った人達すべてが脳裏に浮かびます。

震災で浪江町がバラバラになりました。こんな事があっていいものか。突然の不安と驚きで、余儀なく避難をしたあの日から、忘れられない想いが悲しみ、悔しさとなって残っています。でも、日に日に薄れていきそうな思い出の風景となっていきそうです。

◆夫は南相馬、私はいわきに暮らすことに
必死で車を走らせ、東京に向かったあの日。道中辺りは暗くなり、途中休みながら、夫の親戚がいた横浜までたどり着きました。その後、引越を幾度としました。住まいは団地、マンション、アパートとすべて味わいました。
夫は、浪江緑化という造園業の会社を営んでいました。一時は廃業も考え、ずいぶんと葛藤しましたが、造園建設業協会の皆さんの後押しもあって、南相馬で事業を再開することになりました。
私はいわきに来て3年になります。やっと物件を見つけて、義母と2人で暮らしています。近くに娘夫婦が住んでいるので、孫の世話などもあり、励みになって

近に娘夫婦が住んでいるので、孫の世話などもあり、励みになって



▲工房の入り口の前で



▲浪江から持ってきた大切なミシン

洋服のお直し工房
『ファッションルーム 杏』
いわき市平中山字柳町115-1
TEL 0246(23)0808

また町内にある寿し松様にも、知人の紹介で、1ヶ月間もギャラリイに作品を飾らせていただいたことがありますが、ご迷惑もありません。

また町内にある寿し松様にも、知人の紹介で、1ヶ月間もギャラリイに作品を飾らせていただいたことがありますが、ご迷惑もありません。

◆浪江町での思い出
私は震災までは、家業の事務と、独身時代からしていた洋服の縫製の仕事をしていました。思い出せば、5月の連休、5日間にわたり開催された「大せとまつり」。記憶では、8年間くらいは出店させていただき、お世話になりました。大堀相馬焼という伝統ある行事に参加させていただき光栄でした。
また、十日市には親戚である横山輪業の軒先に出させていただきました。おじさんとおばさんに商店街の皆さんへ声をかけていただき、ありがたい思い出があります。

◆ご家族にはお変わりありませんか
母は変わりなく、今年も山形にコゴミや蕨を採りに行ってきました。近頃は、デイサービスに行く回数が増え、周りの方々とおしゃべりすることが楽しいようです。また、日々の晩酌も楽しんでます。
夫はこの春、福島市の復興に関わるために戻ってきました。娘はエステティシャンとなり、いずれば千葉から福島に戻って仕事を続けたいと言っています。私たちは福島市に居ることに決め、来春には飯坂電車・平野駅近くに家を新築する予定です。家族みんなと過ごせることが何よりも楽しみです。
近々、夫は浪江の家を全部片付けるようですが、私が気になっているのはお墓のことです。盆供養など仏さまや季節の行事をきちんと行うことは、何といても家族の基本ですから、普通にできることが一番です。新しい自宅の近所にお墓を探し、夫の両親を早く供養したいと思っています。

◆洋服にかかわる仕事を再開しました
私は、自宅でやっと、ミシンで洋服にかかわる仕事ができるようになりました。早1年が経ちます。お客さんに少しでも喜んでいただき、お役に立てれば嬉しいです。好きな仕事ができることは、生きがいとして夢中になります。
ふと、手を止めることがあれば、また思い出してしまうので、少しずつ仕事ができることにお客さんに感謝しながら、みんなが毎日健康で過ごせることを望んで、体力の続く限り、心配もあります。浪江の想いを胸に、毎日頑張っていると思っています。
最後に、あの当時、わが会社で労働された従業員の方々に感謝するとともに、どうかお体を大切にお過ごし下さることを願っています。



三浦 幸子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月8日

普段のことを普通に。 いつもの暮らしってそんなものですよ。

福島市駅前の商業施設A X C (アックス)の2階で、工房「ふく福」を営んでいた三浦幸子さんにお話を聞いたのは、ほぼ丸2年前になります。そのお店は、昨年12月にA X Cの1階・ニュー福ビルに再オープン。お店やご家庭の様子やこの2年間の変化、そして、これからに向けての思いなどについて伺いました。

◆移転されましたが、新しいお店はいかがですか
一昨年11月、A X C 2階のお店の契約更新がままならず、福島駅周辺で仕事場を探しました。駅西口の事務所まで電話兼サロンのようなことをしながら約1年弱。幸いなことにニュー福ビル1階の路面店を借りることができて、昨年12月14日に再オープンしました。以前のようには半年毎の契約ではなく、5年間になりましたので、これからはどしどしと取り組めます。
作り手の方々には30人から40人程に増えました。遠くは福岡から首都圏、県内はいわきや会津若松、南相馬や福島の方々などです。洋服の仕立てやリメイ

ク、お直しから手仕事のバッグや服飾小物、手工芸品など、作り手の得意なものに合わせてお願いしています。何度もお見えたたくお客さまからのご要望も取り入れながら、確かなものをご提供しています。そして、お客さまに満足していただけるよう、グレードの高い商品作りを心がけたいと思っています。
駅前通りに面したお店になったことで、車椅子の方も気軽にいらつしやるようになりました。たし、外国の方の来店も増えました。特に和風小物や相馬野馬追をモチーフにした飾り物などが人気です。近所には、まもなく福島県立医大の研究機関ができるそう、若い方たちにも立

◆ご家族にはお変わりありませんか
母は変わりなく、今年も山形にコゴミや蕨を採りに行ってきました。近頃は、デイサービスに行く回数が増え、周りの方々とおしゃべりすることが楽しいようです。また、日々の晩酌も楽しんでます。
夫はこの春、福島市の復興に関わるために戻ってきました。娘はエステティシャンとなり、いずれば千葉から福島に戻って仕事を続けたいと言っています。私たちは福島市に居ることに決め、来春には飯坂電車・平野駅近くに家を新築する予定です。家族みんなと過ごせることが何よりも楽しみです。
近々、夫は浪江の家を全部片付けるようですが、私が気になっているのはお墓のことです。盆供養など仏さまや季節の行事をきちんと行うことは、何といても家族の基本ですから、普通にできることが一番です。新しい自宅の近所にお墓を探し、夫の両親を早く供養したいと思っています。



▲ニュー福ビル1階。路面店となった新しい「ふく福」の前で。「気軽にお立ち寄りくださいませ」とのことです。

工房「ふく福」
10時～18時 / 定休日：日曜日